昔語質屋庫卷之一
初篇
柳葉瀬川
特別
へ13
982
1

門へ13
號982
巻1

この編は故事傳説の錯悞を辨じて童蒙讀史の階梯を世に示す

飯台曲亭翁著演

昔語質屋庫

初編五冊

文金堂梓

春亭勝川主人畫

文辭猥雜といへども多く本據あり之を本傳に徴すべし

門へ10
號982
巻1

自序

雕窩

余兒戯の冊子を綴るに拙筆を以て
書とせんとす。勉て節墨を分て百二十五
事傳説の異同を編集する程の推募を
深究せず。故らに其の實の疑あるを
比余の事を記す要に因て僅に
其の説を録す。
大年星霜十有二年

とく雑話を出し、田舎古紙書の第一
所にて、頗る論を齊魯と鄒一乃
伝話あり。楚辭を荊人の方言を收る
て、巻子又移書を唐に伝話を
なし、角力をこの二人をかたり、先
弁を弱冠、雑説を伝へ、世言代述む
とし、ふる者も伝話とせ、世とまれ、
鄭を陶と擬を掩のとし、唐山淀

義小説のおもしろき事。
巳伝話あり。新説巳
無あり。この書之の作者、
ひとしくなし。紫味を
爭辯、いやしき味を
もとめ、もとめ、
文化七年庚午林鶏養笠伝
於其代者

歌書も
書も軍
書年
高き士
野山
録支考

古物譯とるとの譯
石像地藏菩薩
彼とる

古物
鬼工
筆
古唐の
千枝常則筆

昔語質屋庫初編總目録

發端　室咲の質草

第一　讀書先生歌案

第二　友切丸

第三　曾我十郎衛小紋衣袖

第四　諸葛孔明陣太鼓

第五　俵藤太龍宮入の弓袋　上下

第六　石堂九高野詣脚絆

第七　平將門袁龍製束　上下

第八　眉間尺髑髏盃

第九　橋逸勢溥合一行物

第十　紀名虎錦繡撓鼻褌

第十一　袈裟御前苦節袿

第十二　九尾狐裘

第十三　崇德院天狗爪取剪

第十四　鎌倉時代の上下

第十五　米蕃上人の乞食袋

通計一十六條完

昔語質屋庫卷之一

東都　曲亭馬琴演

發端　室咲の質草

行く相値。莖く相望。枝く相準。葉く相向。華く相順。実く相當。此無量壽経よ所言。天宮の宝樹ふ樹ふて。麈世ふある所ふあらざ。と法容齋ゞ隨筆を。引くゃ霞も雲井よりなれ。南都の皇居ゞ遠からぬ。六田の御の質屋と。子理ゞ和洲も典物と。頼ゞ世渡べよう野五器。堅い牙上義ゞ。好事屋宝樹ふふのあうけ。後醍醐帝の延えよう。後亀山院の天授よで。南帝三世。俺ハ二代。ふく好奚ふ恥ぢべ。道具質ふて活業とと。さ〜ぬ。ぢふ。足ふぬ世茅ハ夏冬の。入費ゞのまり立ち。毫ゞ取ふゞ質草の小紫うち枯ふとぶ妻かるふ。南朝

元来難渋の時の要ハ鼻を劓。鼓に漏さして。大臣納言。辨。參議。槐
門の公族も。先祖傳来の什物を。好質屋が庫住ひさして。八月限りの大
衛波将に流さんとする如くに。利足の碇に繋ぎ留ければ。夏の虫乾も人手に
任しつ冬の火災も苦にもならねど。すべて物にして預る物なれバ。金が敵の世なぞ
さまぐ゛の質入れ世紙絇を十文字。縲絏の中にありといへども其罪にあらずと
いつて其の子にもかへ借銭と譲る質札恨しと。凡夫の愛情心から
質庫に錆かゝる也。けふも雨夜長月の。簷の玉水音寂て。遠き寺々の
撞枕にかよへど。店ハ真闇高鼾主管が斷歯ハ。浴室の漬の栓抜もとく
おのづから開くがごとく。丁稚が寝語ハ燈市の。点数曜に白あり。又炊妻
が寐がへりハ米俵を投るがごとく。女工が外を枕ハ轆しる綿摘にも似たる
べし。凡少壮の寐而不寤所以ハ。血気盛に肌肉滑ひ。気道通ずて営衛の

經ニ云。精ハ精敏ニ不倦也。又云。濇ハ謂不利氣也。

行ぞ其の常を失ハず。故に昼ハ精にして。夜ハ覚せども寤ず。又老人ハ血気
衰へ。其の肌肉澤ハず。営衛の道濇なる故に。昼も精からず。夜も寝
られずと。難経の四十六難に説たり。宝暦ハ今茲五十二歳夜寐ら
れぬハ本来の老人質気といひながら。めつたな病といふ不寐病人そ
たのまぬ金の衛して。うらうらくと睡もせず。蠹つくせうなる門の杓。一馬場
責る天井の鼠に枕数て。つらが宿なるが。窓と起あがりつゝと引提る織細の手燭を
袖にてらち掩ひ。納戸客房。庖厨までも三遍廻れバ怪しいる。質庫のかさに南て
かの声とそ吟えにけむぞ。盗賊よと。胸うち騒ぎ。町る主管小断ねと。
呼び覚えさばや。と思ひしが。猶ハ旧のあてするに賊の入るべきさまにもなし。
為体を見定めんと。流石ハ老功気を鎮めて。怪をつぐら驚かず。足を翻
息を籠庫の戸口へ立よりて。網戸の目よりさし覗けバ二階から洩る燭臺の。

臘燭早こそ向昏のごく。人殺囲堂しそうち相譚る物のいひざま。盗賊あハ仙ざうる。宝樹ハはくくとうち咲て市つくくとやよ。南朝第一の博士なうる。北畠准后親房卿の宣ひーとこそあれ。白鼠を昏時より丘陵の間ゐえて。その出入する示を人まび。中ニ必金あると。白澤圖ハ記ー。又黄金の気ハ赤ー。夜ハ火光あり。又白鼠あると。本草ハもこれをいう。こハこれ金の妖精ゐて。幾も積エ久けまば。或ハ白鼠と化う。或ハ青蛇となる。或ハ黄ゐるとなると。事類賦ハ載ーとうる。豈金銭のまなくんぞ。韓幹が畫る馬ゑ。鬼を乗せくよく走り。金岡が画る馬ハ夜萩戸の芳宜を食ゑ。伊勢國の古廟の絵るハ疫鬼を乗て走り。吉山嘉禾門橋の石剣猿児ハ夜出く人を刼ひ。ひぶ祠摸路ゐる石地義ハ。化て旅客ハ砍ゐまてうされば大刀夜嘗。古書画の類。年を積エ久けまば。その精魅ーて祟ゐ。ちうらざれば鬼の為う。

必奪ひ去ちうと。郎瑛ハ怖ーうとて。過去を引さ未来を推ー。寓ひたるうー伝くゆけばこも正ー。質物の妖怪ゐくやあくんぞくん。と。ぶ〳〵わど毛骨ーち。怖ーも怖ー。見ーさもえんう。腰ゐる鍵を抗ー。網戸の扇を。密と開ー。塵荻落ーの簾子ゆう。彼首是首と瞻仰ば。五十目掛の臘燭を。大燭臺四五本へ。ちーげもるく点ーつ。老ーるあり。弱れあり。和風倍漢様ちーぐ。或ハ武者態のいろめげゐる。或ハ美婦人の白やうゐる。高帳の美衣被ーるハ。秦ゆ入ーんとうる。呂不韋ゆと言ーい。文屋康秀ーが歌勝ゆ仙ーう。薪負る山人の。元の藤ゆ休めるハ。大伴黒主ーが奇を泳ぎうゐ。とうーうまば。朱買臣ーが読書ゆ仙ーう。古往今来もーなくて。日本唐山の大一坐人ーとゆ〳〵人ゆあーば。寃鬼ーとゆ〳〵。寃鬼ゆあーば。こうなられ年ゆ来ーの庫ゆ。籠ーる諸方の道具質ーが。假ゆ形状を顕ーて。おのれくーが

世を墓なりと憂身を語り慰むるの。現世物の執着ふ有情ふ生て無心小入る。古き女の小袖を買てその袖口より細き手を出てうち招くと眼前えとふ。世の怪珍も誣がて。いつるとを待ふやうく安だ。と嗚かくる。大和桧木の宮階子。轟ると彼処へ走れば。二段論てへ吻吐息。二段論てへ又躊躇。三段四段とやうやふ。欄干の蔭より頭を擡て。そんきべ上座ふ一尚の老翁鶉衣よ袴ーて。読書先生と稱するあり。こへ何物ぞ。と孰視べ。和細工の唐木造り。舊の主こそ定うあらね。裏ふ延喜の年号記せ。その容異形の款案なり。燃び隨よ黒く手擱とく。幾許の書を読けんとその時代さやひやれく。この席上ふ第一番の博士とんある物體なり。

第一　讀書先生の款案

その古の読書見臺先生席と佶とんとして乾びとる唆ー。往古学校の盛なりし世ふ。大学博士あり。青博士あり。その後人文章。明法陰陽暦算周易漏刻ホの諸博士を設れて。その道を伝へ。その業を受しんべ。俊傑の学士いと妻くの。その比い某ホ。菅江の名家と謄ヒもゞえ日ふ学生ふ号敬せられ。学校廃ると後ハ且く少納言入道信西の家ふあり。かくて保元の擾乱よ人の心猛くく。三綱既よ乱まとて。相語ふべき友ホなく。村儒ー寄宿ーと妻くの年月を過せふ。ある延元のたゞめ。南朝の博士読書翁ふ伴まとく。吉野の皇居近くとれば。殊更よ鍾愛せられて月よ六斗の講席と缺ぢ。その家三世の重宝ふ当主い甚く虚弱りのふく。手習学問大嫌ひ。家公ハ世話とふ死よ。死まとく一年ーふや立ぬよ大酒と飲ー。類とりて娶る友ぢ。ふれハ遊女の品定ーと。飲と買とふ遣ハ見ふねば。

家傳の秘書を一部售て。三方金なくあり。狩惠を半。経籍史傳。
歌書雑書。和漢の珍書いくつとも。紙魚の肚を肥そのを拘く投てさ
ところ。何のくすしとも譯らねば。唐宋名家の法帖よりも。芝居の番附まろば
とおひ。延喜天福の詠草ハ。熟妓の艶簡をと娯しからむ。爰ハ紙屑同様
ハ。賣りの。損買りの。得。鈌本の仏書ハ清壷の蓋を張ゝ。火宅を
脱さど。古板の方書ハ炮爐よりもれく。炙て黄なゝ。ちりぬ。ハ至て。蠹ことる
孟子ハ。紙めをそるさん。戸の節孔を塞ぐ。終りて。瓚闕隙の一句を遺
彼書を燒き。儒を坑ずと。支えて。秦の始皇の悪政ハ。易経暦書
残ハ。驕奢を省き。衣食を浄く。年と共に積貯く。祖の秘書ハ
淫酒の為ハ。一部も遺さず。沽却れ。残るハ。ひとつ。いくたびか
道具屋の。ハ遍らんとすれど。正く家の像見と員数ハ。

涙とともハ辛じて。苗め。腰巻も。崩れ。土蔵の棚へあげ
らるるよう。日待の茶番。年忘れの。素人浄瑠理の見臺ハ。調室から
る。朽ちて。宋人の章甫をかぶるも劣る。果ハ質屋
の庫住ひ。罪なくて。縲絏の恥も。晴主ハ住ゝ。身の不覚。各位の心の中さえ。
推量られて。痛。と苦りきろくのひけ目。衰皆頻ハ嘆息。現
先生の寛ハ。ぐく。宝ハ。ぐく。身のさいぐえ。といハ凡夫の手前。彷。先祖の
千辛万苦して。組立て。家庫所領を。懐ひて。取る子孫ハ。徳もなく。祇
もなけまど。不自由きわぬ。洪福と洪福とハ。ひもりけど。淫酒の為ハ
汎ぐ。紀宝を。怒地失ハ。大慾ハ。所謂。慾ハ。ちれど。宮ハ人のこと。だろう。
おそ。ハ紀のハ。おそ。唐山ハ。戦国の。ちれ。とさくその子と質とて。歌へ
遍せ。も。妻ハ。大日本の上古ハ。人のこと。淳朴ハ。人質もくのるに

賢屋庫巻一
玉藻ノ前
紀ノ名虎
曽我五郎
天磯ノ虎
諸葛孔明
讀書先生
平ノ持門
野事屋
宝樹が貫庫の
二階ふきいて
讀書先生
勸学の丸
橘ゝやきり女兒

に保元平治の播乱より。親子の間でも兄弟でも。かゝくありて由断せずば。寿永の頃の木曽殿は。その子志水冠者を枉て。鎌倉へ質に入し。又元弘の三年にも。足利どのは。その三男千寿王を質にて相摸入道へ遣与せし以来。些旗色がちらつくするとき。人質おゝく遣緑せね大将は称するなし。されば栄枯得失は。人間の常なるに質屋といふものは世にあるうちは。金銭の融通絶て。貧乏かくすことよきてもあれ。人質と道具質と品こそかはれ俺们は主の先途によろこぶる忠臣世々の史籍に載られて。芳しき名を留むべきに可惜いまでも質におけば。衣類雑器は何にでもならぬぞ。而も餘計に借んとて。切着に主管と口説のこと。受戻さぬ日の遠慮せぬぞ。乱暴は両損と。それゆゑ蝦物に瑞がさらくで推曲られ尼限果て世に出てくも。質の流と賤めらる。過世のつたなき不執ぞや。鳥の頭も白くなり。馬の額へ角を

生ても。かくまで利足が交て。不渡と返る日はあらじ。嗟夫朽ともやとするめぐるまに声かけ立て発憤して。読書先生も滑らかなりとその述懐へ理なるかな。各位の宜へども。宝は身のきず皆ともいふは善悪二つあり清貧にちかく世に零落し。親の為主の為に食その外弦がかかりねにとて有べき物を沽却して。けむたき一乍什物は。且く質入さする者。恨むべきことはあらじ。淫酒の為に身の皮剥。白徒に品かりて。かかる忠孝信義の人は年中質屋へ奉公して。も文人は方策を售らぞ。武士は腰刀を質に置ぞ。これぞその本として一バありて其の末乱れて。末おさまらんは伝に和漢の宝ぞは。あれど。仏法僧の三宝にも。おとらぬ書籍の名のうすらぎしも。いつもなりく睐く。大納盗賊の目かゝりの第一は金銭第二は衣裳第三は大刀。第四は绸織第五は雑具なりとぞ。昼寝の由断をなしそこて乾しける洗濯襦袢をもとらば。水入口

の間に死人入れて。勤をすれば茶釜を外し。茶灌とさらへ昏鳶はあれど。
一帙五圓金の唐本が。眞の先へ投しそのうつも方策のを捉て去る。盗賊は
いと稀なり。ようやそろ。價と知りて盗むとも。珠書は義書の印あれば。
二重をたるふ便あり。信の道より入るのをのらば。倍はさらく賊でもそなぬ人の
宝とをぐさりのは経藉史書よりとめるふ。かる宝を宝とせざるは宝を盗
迷ひく将武夫の宝とをるりの。弓馬兵具の武器よりもとれども文
晴け見ば。真の弓ようとはいはれざど。商賈の宝とをるりのは。四方雲顧乃
君子なり。をれども算筆小疎ければ。一日も世はうさら見ざど。武士は武士の
学問あり。商賈は商賈の学問あり。士農工商おのれくぶ。家業をようて
よく身を脩め。行ひを怠むりのは聖人の徒といへべ。故いかをとられば武夫
の弓馬剣法。農夫の時は耕し。転るも。山妻の蚕飼しそ。

績ぎ機織るも。番匠の縄墨準縄りそ。く柱をとるも。商賈乃
算盤取とゝの本残を減さざるも。をのをれくふ聖人の教ひ。こくとにかれば
人間日用の所作ゝ。悉く儒の教なれば。ひとく戸をよりざるはなく。入るを
をくの道よりらざるはなし。家来は主を敬ひ。子は親を厳び。妻は夫を冊き。朋
友は信を尽し。長者は坐をゆづり。少きものをば憐こをのづけ。嫁ぎ
聘入の式三献年賀追善いべさらん。飯碗は左より。餐筋を右より採と。近
ゝる聖人の教ふよりく。礼節の端くとをりるのぐら。妻くは聖人の遺德
をもんど。亦是天地は萬物を化育とれども。萬物は天地の德をもんど。親はその
子を養育とれども。その子は却又母の恩德をもいざるが如く。普く德を布
なのぐらゝその德を徳とせどと。是を名つけて仁といふ。をるふ人あるとれも井の
底の蛙ひとく。大海の濶さをもんど。三尺四方の井戸側より推當て大海

の淵さと推量す。僅か四書五経の素読をさせしのみにて、学者ところえてその悟あるべしとて、論語ようの論語まうとて冷笑ふ。論語読むの惑ひぞかし。論語は実ふ読易く、論語は信ふ解し難し。古注集注いづれもあれども、その糟粕を脱さず。よく論語を読むのは、道学成就の人といふべし。これをもつて難しとなすども、学べば則難からざるなり。もつともの学ばれば、その濁を濁とし、濁るをもつて濁とし、理義を晴し、眼は黒白を照らし明徹し。志すれども学ばれば、その曉暮を曉暮とし、黒白を辨じ、耳は声を合する律管なり。もつともの学ばれば、その管塞をもつて五声通ぜず、口は味ひをもつて庖丁とし、もつともの学ばれば、その口濁るをもつて五味を辨えず。味けども聴えず。もつともその味ひをもつて彼烏獲が牛を庖め、親衛が舟を負ふの膂力ありといへども、学問の力を借らざれば、情を割慾を禁ずるところなければ、これを人見ば学問の力なりと。万夫不当の勇士小拐なり。悲しきかな世俗は只管情慾に惑はされ、利をとり孤を道に入れば、書籍を捨て宝とせざれば、吾儕をして如く、美里の囚となるをみて、同病は相憐む。同気はかのごとく求む。年来ひとつ質庫ふるのごとく、眼競して過さんよりは、おのづから懐ひを述べんのみ。ところをもらんとさだひとるべし。少許砕けたれば醒るふ近し。恥をもつてもたれば、ふ遠からず。いざや両夜の品定めして、捨びのごとく信じ、ちて扇を颯と推開き、胸のあらをもちあらはば、多有理と雷同せり。

第二　友切九

その二に忽地一箇の壮佼ありけり。そひを述べ、と呼ばつく。蒼然そして跡り生

衆皆驚きそれをうんとび。古金襴の袋小袖小。金覆輪の袴を穿。洞金造
いろめこさ。赤銅鮒子の丸鞘の帯を締。重藤の腹巻小。南蛮鉄滝の刀術
を懸て。金無垢の拂を。ちらりとさの細くて。意気揚々たる形勢ハ。問ハねど
名をきく勇士の骨相なり。絡垂の友切丸。五幕金流の名刀ぞと。感ぜぬ
ものハなかりけり。彼壮佼ハ。ちらりと眺で。瞬きする間貫よ。緋をそ。ぞ。ぞ
。焼又を切りて。匂ひのでる息を吻き。世よ朽ちもあるるれ。これハ往昔建
久四年時ハ五月の両夜の狩倉。曽我五郎小伴きて。工藤祐経を殺とう
とる。時宗秘蔵の名刀。源氏の重宝薄緑と
呼ぶ。又友切丸の名を負せる。故よ一旦紛失して。鬼王小よ苦を被ぶと
いへども。彼ハ。ふる悔て。友切丸とく索ふ。名の諸悔ふ。急ハ出ぞ。
今小至て。薄緑と呼ぶ。のめそそのけを。きるもきぬもなくて。友切

丸と稱する王。遺恨の至り。言語同断。このとうと説あるさどハ。
つぶ名を泥とん。打もあらべとぞ。今夜の團坐ハ。孫ふよ幸ひ。
やづつぶ素生を禪ぶべ。耳ふる。ゆめ抑五十六代の聖主清和
天皇よ。四代左馬冬源朝臣摂及孝明よ在せ。べ世の人。孝田満仲
と稱す。ちるふ満仲。ちるふ肯ふ。有一年錦紫の緞
治を召ふ。二ッの大刀を造ふ。ふよ件の緞治ハ名誉のものぞ。
八幡宮へ七日社参。公式頗丹精を抽つ。凡六十日ふ。最上の大刀
二口を終り。長サ。ものく二尺七寸。満仲ぞて有罪のものを切せて
これを試ふ。一ッの大刀ハ罪人の髭を加て切ふけ。髭切とこれを
名つけ。又一ッの大刀ハ。膝を加て切ふけ。膝丸とぞ名づける。かくて
満仲の嫡男頼光朝臣の時小至て。美田源次綱。有一夕。一條大宮へ使

ちとく。彼鬚切を主より借りて帯しうべ。不慮ふこの大刀をもつて。鬼の腕を切ちとつつうて鬚切を更めく。鬼切とぞ呼るこのこの教光病床ふ擦丸の大刀をもつて。山蜘蛛を砍すゝとあり。こうて擦丸をも改名して。蜘蛛切とぞ呼るさてこの二口の宝刀をば。満仲より六代の孫六條判官爲義が家ふ伝へうるふ。有一夕。彼二ツの大刀。風るとゝ鳴〻。鬼切が吠うる声ハ。獅子の鳴ふ似ういてく。又鬼切と改て獅子の子とこゝを名つけ。蜘蛛切が吠うる音ハ蛇の泣ふ似うとて吠丸と改名ゝ。さる程ふ爲義判官ハ。彼吠丸を壻ふ出ゝて。熊野別當教真ふ与へふ。かゝる宝刀を教真が。牙ふ著ぐさふあゝぞ。こく。権現へ進ちうけるふ元暦のとゝめ。範頼義経。鎌倉殿の代官として。平家を西海ふ討の自。熊野別當湛増。ゝ教真が爲義より泣うけれ。吠丸の大刀をもう出て。義経へ贈りしうべ。義経殊ふよろこびて。赤吠丸を更て。清緑と名つけ。これハ熊野の春の山の緑をうけて出ゝれば。清緑の名を負せ。かゝて義経ハ。舎兄頼朝と不和ふなり。大切ありといへども。鎌倉ハ入まゝ。空〻腰越より追ゝされて。京師へのがるゝ。ゝ願の旨ありて。彼清緑の大刀をば。箱根権現へ奉納まうけるゝ。建久四年五月廿八日。曽我五郎時宗。父の仇工藤祐経を驚んとゝもとゝ。箱根山へいのゝて。別當行実ふ外なら。牙の暇を告ゝ。行実ゝ中その気きを猜〻。彼清緑の大刀をもう出〻。時宗より与へ〻〻うべ。この大刀をもつてく。おり人隨ふ。仇人をば撃ちたりる。そのゝち清緑をば鎌倉ふ送れるゝ。太平記の叡の巻ふ。この叡の巻といふりのも。舊ハ太平記の前巻ふあるねど古書ふ。ゝ。この流

ふもとゞみとゝれハ箱根の別當行実ゞ手よう。曽我五郎ゞ獲しる大刀を。
満仲のとゝ。そゞめて膝丸と名つけぬひゝを。れ光とゝを蜘蛛切と改名
し。為義のとゝ亦吠丸と改しるを。義経亦。薄緑と名つけしるのめふゝく。
友切丸ゝめゝゞ。友切丸ゝるゝぬ大刀を。友切丸とゝく毎春ゝ索るから
生ろねてゞれゞ為ゝ子を棄妻を賣。苦公看管の腸を断ゝるゞ。さそ
彼友切といゝ大刀ハゞゝる物ゞとゝのゝふ前ふ演しる獅子の子の別号ゝ。
為義判官。壻ゝるゝける。熊野別當教真ゝ吠丸とゝゞせゝゝ。一具ゝるゝ
る大刀一ッ失ゝ。片ゝるゝゝゝゝゝ受けゝべ。播磨國ゝゝ。ゝゝ假治を
召上ゝ。獅子の子を本ゝゝゞゝも違ハゝを造ゝせゝる。最上の大刀ゝ
けゝべ。悦ゝゝゝ限ゝ。目貫ふ鳥を似ゝゝれべ。小鳥とゞ名つける。
ゝの小鳥ハ。獅子の子ゝ。二分ゝゝ長ゝゝるふ。有一日二ッの大刀を

抜て。障子へよせゝけて置ゝゝるゝふ。人ゆさゝゝねふがゝくと倒ゝく音
吹えけゝべいゝふ大刀ゞ抜びぬる。損ゞゆきゝらんとゝく。ゝゝ者ゝてんゝ
べ。目ゝハ二ゝゞゝ長ゝとゝひゝる小鳥ゞ。ゝゝゝふなゝふけゝハ不思
議ゝゝ。さゝるべきゝゝゝある。截ゝるゝ。ゝゝゝるかとて先ゝゝゝゝゝゝ。
怪ゝて鞘ゝゝるふ。月貫折てゝゝけゝ。抜てゝゝゝゝ鞘の中ゝゝゞゝ
新ゝ切ゝゝ。目貫ゝ突抜てゝゞゝたゝゝゝゝゝゝ。これハ一定獅子の子
ゞ切ゝるゝゝゝゝゝゝ。獅子の子ゝ改名して。友切と名つけゝゝゝゝ
後ゝ為ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ刀ゝ嫡子ゝ形ゝ。壌ゝゝゝゝゝ。亦ゝ氣の巻ふ
いゝゝかれべ友切丸の初の名ハ。鬚切とゝひゝるゝ。れ光のゝゝ。鬼切と改名し。
為義ゝ獅子の子ゝ改め。更ゝ友切ゝゝ名つけゝるゝゝ。保元平治物語
東鑑ふゝゝゝゝゝゝ。友切丸のゝゝゝゝゝゝ。東鑑。文治元年九月十九日の

條ふ。法皇御護の御劔。去年紛失せ。去る比江判官公朝。これを求
めて献上せ。しに。聞とるの間。今月二品頼朝御書をのつて公朝ふ仰
らる。是以左典厩頼朝の大刀を奉献せ。とる所。吠丸蒔鳩こ。なり。
同書文治元年九月二十日の條ふ参川守範頼朝臣来る去月二十日。
西海より入洛せ。法西ふ打ち。仙洞の重宝御劔鵜丸を取り。今度進
上せぬ。とは一平氏の黨類寿永二年城外の刑。清経朝臣御劔二
腰を取とり。吠丸鵜丸とは。この文より由とれり。為義吠丸を熊
野別當教真ふ与へ。そのち湛増の手より。義経とは。を沙。清緑と
改名せ。遂ふ箱根権現へ進ぜ。とるを。箱根別當行実。おは。を
晋我五郎よりとり。とるとは。劔の巻の説も又信じがたし。彼吠丸わ。
義朝のとは。後白河院の御護刀ふ進ぜ。とのひとるふ。寿永二年の

十四ノ系ふ教真ふ一無野別当長快その子湛増実八為義の子と注

比清経朝臣こ。を取て。西海へ去るとは。ども。平家ふ行もなく
滅亡せ。しぬ。文治元年九月の比。再び院の御劔こ。入るのこ。とを
いふ。東鑑を證文とせ。べ。とのこ。とを批評せ。んば。為義より平女婿
宝。る。吠丸の大刀を。ば与へ。べ。こ。を教真へ与へ。後悔し。更ふ一口
の新刀を造ら。しる。舊刀の為ふ。二分だる切縮ら。ま。こ。とて。獅子
の子を改め。友切と名つ。るとは。説ハ。怪説ふ。よる。く。いふ。信ず
かざ。し。又東鑑ふ我。る所の。鵜丸の御劔ハ。保元物語ふ。あ。んえて。
為義判官子ども。鞍倶し。て。新院の御身方ふ。ありし。ども。親院御感
のあまり。近江國伊庭の荘。美濃國青柳の荘とともふ。賜ふ。る。
鵜丸の御劔。とは。この鵜丸ハ。白河院神泉苑ふ御幸なり。

鶏をつかせ給ひ。殊ふ逸物と聞えける鶏が。不圖水中へ
被さあげける。金覆輪の大刀なり。白河院殊ふ秘蔵ましく〳〵。
鳥羽院へ伺ひ給ひ。鳥羽院又崇徳院へまゐらしぬ。ひけ給を。
為義判官へ賜てより。かれば為義ハ道降人となりて。嫡子の義朝を
憑ミて。ようせしるとも。彼鶏丸をも。義朝へ賜ひ与られるを。由備
ある大刀なれば。後白河院の御護刀ふ召さるべし。東鑑ふ初
ふ吠丸蒔鳩と記し。次の條ふ吠丸鶏丸と記せしハ不審し。義朝の
とも鶏丸を。蒔鳩と改名せられし。又蒔鳩ハ源氏の重宝。鬚丸の一名歟
易ぬべしかくのごとく実録ふ。その本を推と。ハ曾我五郎ふ伴れて。三度
祐経を殺ける某ハ。源家の重宝。友切丸なるべし。又義経の秘録と
改名ありとい。吠丸ハ鶏丸ハ時宗が。仇人祐経を殺ん科ふ年来

試して剣ふ刑し。其銘の彫刀なれど。時宗ハ古今ふ双の勇士なり。その夜
比類なく働しそけるとハ。大刀も名の如ふ紀よあらざれバ。疑なしと云ふ。当時の
小説俗書ハ義ハ為緑とまゐ。義ハ友切丸とまゐ。某が功名ふ。
空し。吠丸友切ふ奪れしなりとされバ大刀のことを記せ書名ふ剱の巻なども
喝るなり。中葉より。大刀と剱を混雑そひとふ。ふ誤なり。
和名抄ふ。剱ハ和名を施さず。別ふ屠漢を挙て。文選の流豆流岐と注
せり。今按ずるふ屠漢ハ。呉王夫差が。伍子胥へ賜る剱の名なれば。剱と
豆流岐と和名せんものからなるべ。さて和訓つるぎとハ。元さるの義なり。
両刃なるゆへ。剱とも豆流岐ともいハゞ。又和名抄ふも。一刃ハ刀と云。大刀。
和名太知。小刀ハ太那と注しなれば。たちもかたなもまた一刃のみふ限れり。
和名太知とハ。たちさるの義ふて。かたなとハ。片ふなるべしの略し。小刀。加太那。

と和名抄ふ注したり。今眼指と唱るものは、かくるゝ。きさかくるゝと
唱るものは、こちら。今のかさなは、片手ゆく羅べきものふあらば、こまとり
なり。和名の抄ふ載るものなれど、久しくまそ。その悞とまらじそなりん。
職原の人ふ、ぢぬぐ。又今の人ふ、ふくさなと唱るものも。和名。賀太奈ん。
和名鈔。刻鏤の具の部ふ、刀子。錐。鐫。鈐。とあるぶ、出せり。この字を被て
唱るはいと後のことにさぐ〳〵。劍の巻ふ記ところい。合点まぐ〳〵
妻ー。鬼は鬼神と熟し。造化の迹なり。又寃鬼といふとれは。幽霊の
類なり。いづれも形なれのん。もろれふ綱はいふて形なれ。鬼の手
と切あらりん。ろ沼ぐに。又獅子は天竺の猛獣ふして。唐山ふぐも
なれのなるふ。為式はいふて獅子の唱声をうまりて。大刀の名
はせら毘ゆん。野猪をねのもそも。又略して。ものべ。真の獅子

はあらざる欤。もしよ大刀ふ名つくるとき寃くは同貫ふよるとあれば鬼切
の目貫ふ。獅子を造ることあらば。さて獅子の子と改名もとれはあ
らんぞらん。又蛇の注声ふ仰ふうとはいふも。ものつくるれとて。山兒なのどの。
大蛇の鼾睡を吹ふるとあるなんどいへど。蛇の注声を吹ふるといふなのは。
絶へ吹ざるとも。かく吹ぐれ。蛇の注声を為式はいふて。少もう
ひりん。この判官は耳ふ能あるなの。炒葛盧ふ一のべ。公治長ふ者ふ
ものと物ふまるせーなのなけれとふもかくふ信ぐ。いりふよ。吠九と
名つけーと別ふ必以あべー。なーなの虚実を辨じてそふ恨をば人ふる
べけれどなの世の人のまるふるれは。曾我兄弟の恨ぞ。安元二年十月。
彼胞兄弟ぶ父なりけり。河津三郎祐泰は。伊豆の奥ふ狩場のなさ圖ぞ
も矢ふあるふ忽地命を隕しふ。時ふ一萬僅ふ五歳。（後ふ号我十郎祐成と名告る）

伊東祐親
女児を
逼て
頼朝の
子を
奪ふ

頼朝

伊東九郎祐清

祐親が子の二某甲

伊東祐親入道

辰ひめ

弟箱王僅よ三歳。後よ名我五郎時宗と名乗る夢のうちもうるぶ。八九歳。
才へ七歳といふとなん。又祐泰を殺しるハ。工藤祐経が所為なるは
をきいて。忽地復讐の志おりう。治承三年の秋八月。前右
兵衛佐頼朝高倉の宮の令旨をのうけふるふ。伊豆の
山木を討て。石橋山小旗を揚。その軍利なしく。一旦没落ものく。
廣常常胤ホが家り助けふうて。ぐ行ものく。関左八州をうち従へ。
基を鎌倉よ開きのくべ。このふまでハ。平家の恩顧よ繋りたりる。坂東
武者ホ。ますくハ旗ををく縁を求め。鎌倉へ出仕をとのくども。祐成時
宗が祖父。伊東祐親入道ハ。義ふ伏て勢ひよ属うど。小松少将惟盛
の陣所へ参り加ふんとく。伊豆の鯉名の沼より。海上を廻らんと。後河の
かく。弘出せ。天野藤内遠景よ生捕りとて。黄瀬河の御旅亭へ

十四巻の系図よ引ようけるふ。三浦二郎義澄ハ。祐親が壻なれバ。罪名落去の祐成
河津三郎義澄よ預ふる。まうるふ先年。祐親入道が。祐朝卿をもうりをうんと
祐近よ作る祐近の嫡男祐道津津ハ郎と称をこれ祐成時宗少又ハ又祐道の者伊東九郎祐志ハ他ハ次の巻よ

まうるとき。祐親の二男。伊東九郎祐清。密よれを告るふようて。その
難を脱をとのひ。べ。その志を忍食出されて。勧賞のうべとて。召行ひ
のふといくども。祐清ハ是を推辞て受ど。又ハ赦そ。て囚徒とのうふる
ふ。その子ども。りてう恩賞を蒙るべきをく。罪の暇をのへるべ。とさら
きろって。平家へ死かうん為ふ。ものく上洛。恩のあるよ死をりて報じ。後よ
討死しくうしべ。今よおいて美誉とせう。そのち謙倉殿ハ。祐親法師が
罪を宥め。対面せんとくめされしべ。祐親孟く。いも年ど。忽地目叡
志よ。縁故を頼朝卿流人とのうて。伊豆の伊東が宿所り
坐ヒ比。祐親が女児名ハ辰姫とりふ秋ふ密通して男児を産しのハ程よ。父の祐親涙く

一本ニ祐清を祐親が嫡子とし太郎とし三男とし いづれか是なるを志らず

怒り。且平家の後嗟をおそれがゆゑに。出生の赤子をバ。家隷して失ハせ。
又我々せられたりなまらんとしたりけるを。祐親が二男祐清ハ。遠慮
あるものなれバ。我々の命運ニは竭ぜん。つらゞ又のふ謀りありて。終ニ
脱出ありて佐の助を求めまゐらすべし。その人の骨相を許るに人の上風よ
主べうもおぼえぞ。このとき此の恩を施さバ。その志を汲らんとおもふ。
又が餘命を繋ぐよろこびにあらんかな。且その外孫ハ殺さとも。平家乃
免許を受ずして。頼朝さんに害せんハ。謀のよろしきにあらざぞ。又が謀略
合期せざれハ。妹が密通の悪名を世ニ吾くあるべし。このころの後よ京師へ
聞ゆるとも。既ニ出生の赤子を失ひしれバ。平家の崇あるべからずと。彼を
そひ宣一をもちひて。さてその計を我々へ告るなるべし。あるに世俗ハ。ぐて
平家を憚むのあまり。その理義を考ずして。只管伊東入道を悪人と

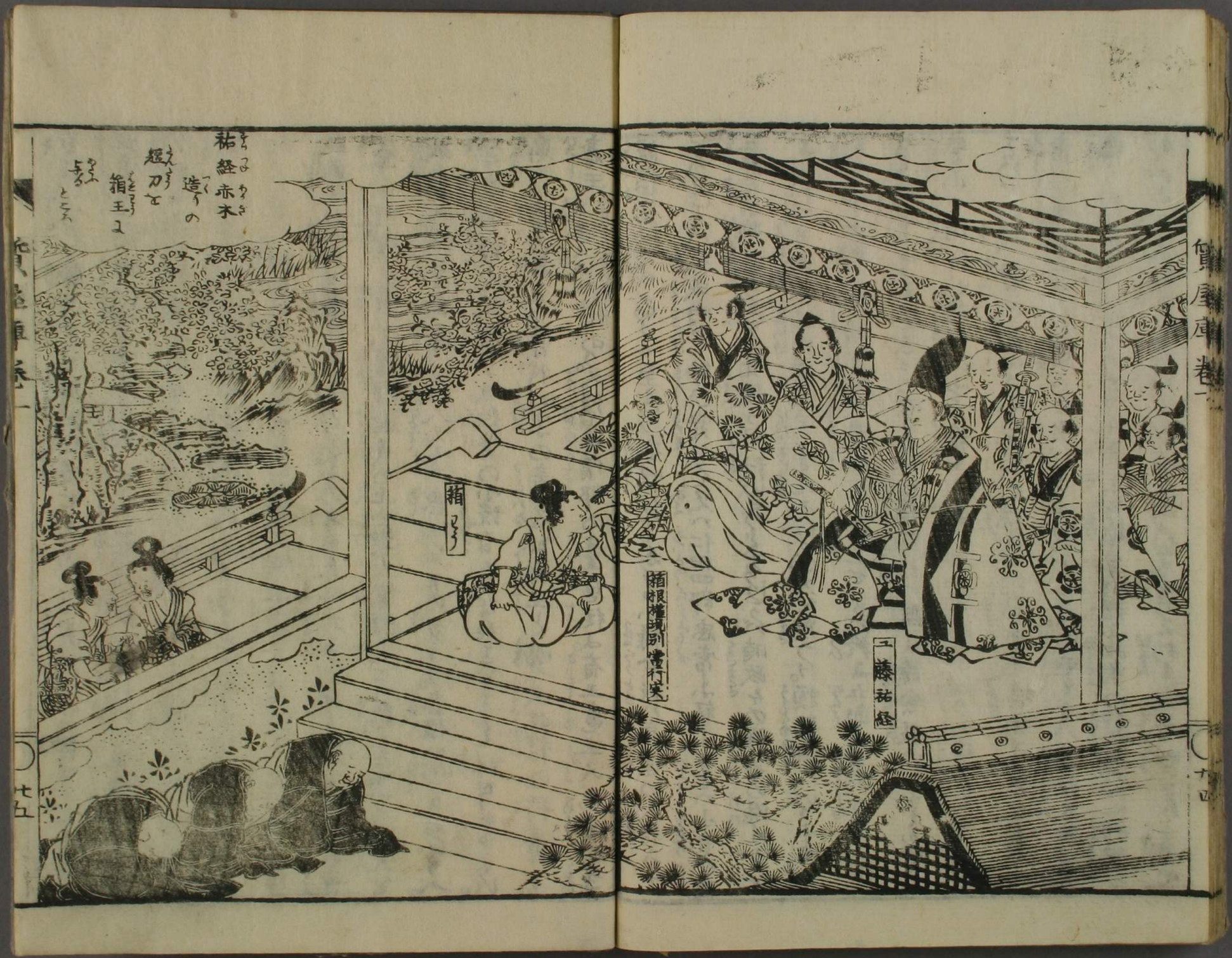
のゝしるハたがへり。彼祐親入道ハ。元来平家恩顧の武士なり。あるに
その女児が。親の聴を受ずして。翔隙を潜り牆を踰。我々と密通して。
既ニ男児を産しるに。女児が不義ハ縁ニ連れ平家の仇となるべき人の
子を。密かに養育バ実ニ祐親入道ハ。義もなく恩をもちるねものなり。
彼北条時政が。我々の聟を擯んとおもひてなに。女児政子へよびひそか
とあらバ。山木判官へ婚縁を締バし。既よその密夫なるをしるといへども。
山木が勢ひニ憚りて強て政子を嫁しぞ。山木が席所へ送り遣せしと。
祐親法師が忠義のみよ。外孫を失ひしと日を同しく謗るべかりぞかも六
祐親入道へ。その憎むべきものよあらバ。頼朝卿ハ大器量の大将なれバ。
よくこの理義を弁へてぞ。はじめニ八九郎祐清を召出して賞を行んとするよ。
受ざりしかバ。忽地舊き怨を去て。祐親法師が死刑を免して対面あるべん

とへ仰せらる。かくてぞ祐成時宗ハ。祖父も伯父も。平家の方人なるふ
よつて。世の中も狭くなりて。曽我太郎祐信ふ養ひ。浮浪人ふなりあつ
なるぞら。五郎ハ幼稚さらん。勇気殊さらふ逞しけれども。母公ハ終ふ禍を。
惹出さんと。陪ふて。祝髪して亡父の菩提を吊へと教訓し。箱根権現乃
別当行実の弟子となりて。登山さりたまへども。時宗いよ〳〵復讐の志
穆〳〵と。遂ふ箱根を下山せらるべいなく母公ふ責懲されて。彼此と逡巡
あるゆゑふ。北条時政ハ。五郎が勇敢鳥なるを。内心ふ憚るゆゑ。
とりく手なるづけて。化なるなく歎待し。ゑぶから烏帽子親と稱して。元服
元服さ。時政の一字を与へて。曽我五郎 時宗と名告らしむ。時宗
の宗の字ハ。さきぐの説あり。時政ハ六世の執権。相模守時宗朝臣
の乳名を。北條五郎と稱せり。曽我五郎時宗のもなハ致といふ字を書べし。

こまを時宗と書へ。北條五郎とそうちゞくること。そよへもあれど東鑑ふ。
曽我五郎時宗とあれバ。悞とハいひゞ。譬バ西行法師の俗名を佐藤兵
衛義清といひしがごとし。ゆゑて則清とも憲清とも書くるが如く。どのころの
記録ふハ。人の名告ふ。訓のうちふ字をいくぶくも引つけて書例あるべ。
曽我五郎の名告ふ。或ハ時宗と書あるひハ時致と書くるのれべ。
推量の説と加るとなハ北条時宗執権の世ふハ。諱て致の字ふ代るふ。
とあるぶ。さて北条時政ぶがくのごとくなる我人命をとりたまへて。竊ふ仇敵の
後ふんくうるるハ。真実よその孝心を感激せしふあらば。底意ふ。その
胞兄弟と欺き賺して。謙倉殿をとりたまへん為。その所いふとなれた。
このとき平家既ふ亡びて。四海の賞罰。謙倉の決断ふあり。我れ
世を早くもつんよ。我れハ幼稚し。ちらバ海内の権柄ハ。おのづら

時政が一家ふかく、ぞうづ、ぞうづるぞ。と深く謀りて。彼兄弟ふ、ぞうく
ひとひ火を焼つゝ。密ふ説客をのべて。藤金殿ハ。其許の祖父。祐親入道の仇
なり。祐経をのゝ聚とゝ死ハ父のうめふ孝なりとも。祖父の霊を慰ゞ。とゝ
ゆるゆゝと密語せーるゞ。祐成時宗ゝ弱冠ゝ。且祖父祐親が自殺せし
縁の恨をもゝゞ。その勇あまりあれど。その智の足らざる故。ようゝく北条
ふ欺詐らるゝ。又一層の恨をなす。遂ふ時政が為ふ刺客とゝなるを嘆ゝ
ゞ。仇人祐経を聚ふ。ゝる夜。藤金殿を招ーきゝんとハもゝるなり。嗚呼
惜ゝるゝ。この胞兄弟が勇を好ひ。その志ゝるゝ。牧ゝ々ハ隗義ふよりつゝ。舊
怨をゝひ。ゝのへゞ。遂ふ祐経を殺免ーめんとゝいゞども。祐経も又狐をもる老入道
なれば。忽地ふ自害もゝるるゝゝ。もゝれば祐経が枉死ハ。自業自得なへ。
祐成時宗とのゝたへゞの母幼弱ふ。そゝりの頭未をもゝゞ。老奸の舌頭ゝ

誑惑されて。そのもゝゝを至ます。亦惜ひゞ。もゝるふ藤金殿ハ高運の大将ゝて
とゝせしゝゞ。祐成時宗勢ひ究アそ。兄ハ仁田四郎忠常ふ怒ゝ。弟ハ小舎人童
五郎丸ふ抑留らるゝ。北條が奸計いとゞふるしゝゞ時政その機密の漏んとを
おそれて。亦密ふ祐経が子。犬房丸ふ。ひ火を焼つゝ。頼朝卿ハいろふゝして。
助ゞ申とおゞゝ。時宗と犬房丸ふ。ゝ。ゝをせーゞゞ。終ふ五郎ハ有ゝらゞ
るゝ。何とゝりて。とゝるとゝのゝゞ。ユ孫祐経ハ。殊ふ藤金殿のゝゞゝめゞゝ。
勢ある清神ゝ。箱根山ゝ。権王が氣をとゝて。赤木ゝ似りの短刀をとゝせー
ゝゝその復讐の志ある。ゝゝゝゝゝゞ。既ふその復讐の志あるゝゝゝゝ。
常住坐臥ふ。ゝゝ。ゝゝを禦ぐの用心せゞゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。浪人とゝ。
振ゝ。将金ゝ。ゝゝ。ゝゝを遂るハ。裡ふ此条の翼あれゞゞ。時政ハ
かゝのゞ。祐成時宗を欺詐りて。刺客とゝつゝゞ。そのゝゝゝゝゝゝ。


祐経赤木造りの短刀を箱王へ
箱王
箱根權現別當行実
工藤祐経

勇我を賜せ給へ。禪師公曉とそのことて実朝公を殺せり。こゝに至て北条又子の奸計ゆゑ公暁を教唆して。平氏の統を絶九代の執権はじめ給ひぬ。公暁申又又教家々の奢をのゝしり比へ幼小ふして。この頭末を詳ふせざる人は

はが人をうて。右大臣をうそもん又の仇なるべらんと。公暁は実言とゝ思ひ。又の仇なるべらんと。禪師の外出をまちうけ。公暁は世を。公暁は実言とゝ思ひ。又の仇なるべらんと。

ぬ。政又の大臣を害せ申のそのらざそのあ申忽北条が為に殺されぬ。北条又子が奸智に長ず。曹操直義の上ふ出べし。当時人とゝ欺くとも。いつでも天を欺とゝ思ふ。後世ふ論定りて八人又その悪をいふ。各位は何ぞ思ひ人。

ゝ家拍子といふ冊子申。往昔の小説なるべ。なれとも記せ申べ。

鬼王は童の名なり。曾我時宗の童名を箱王と唱へ又箱根の行童。

寿王 東鑑文治五年二月十二日の条童

あり。又俊寛僧都の童虎徒。有王亀王又為義の季子に天王あり。源氏経の乳名。遮那王ホ。名峯ふ追あらべ。直ら名。

鬼王申又童の名なるよしを考べし。東鑑建久四年五月廿八日の條ふ。

曾我五郎を大見小平次に頼ふ。あれど。近江小平太とのみ。

又ゝ。新左エ門国ゝ。後人の誇俗ふ就中時宗朝夷が草摺ふ。

絶て。とは建保元年。夏五月の和田合戦ふ朝夷三郎義秀が足利

氏の澄の草摺を。ひきとめて。組人とゝ。氏氏の勇力ふ。

かゞとらひて。馬ふ抱ひ上奉らせ。草摺は弗と断離して。朝夷が手ふ

残り。主は逆ふ脱を。大ると。東鑑その條の軍記ふ記せ。と撮合て。

氏氏と。曾我五郎ふ似ゝ。彼朝夷は。和田義盛が三男ふ。不曾

氏仲が妾。鞆絵が産とゝ。元暦元年春正月。不曾氏仲は近江

の栗津ふ。討死。の。比。鞆絵は和田義盛ふ生捕る。義盛鞆絵が

勇力ふ愛て。謙倉殿へまゐ[illegible]を。朝夷を産しさしべ遠久四年。勇我五郎ぶ父の讐祐經を殺ふる。されい。朝夷僅ふ九歳なる。戎ふ七歳なりとも。きつぶべ義秀。勇力の人といふことも。ふの。されば時家と力競せべ。瑞卿の車ふ向ぶ如けん。彼義秀と朝夷と唱るふん。安房ふ朝夷郎あり。りこらふ所領あり」あやふさつねべし。人ふらかくてあるりのを。友切丸ふらぶ。友切丸といふるも。憤るふ足らびとせん欲。さんふふぶやと小膝を敲き。席を抱くいれまけど。衆皆吽とぞ感じる。

昔語質屋庫巻之一終